

A 語句の意味と読み

- (1) め / 「つま」ではない
- (2) うたあはせ／なほし／みす / 歌合＝歌の優劣を競う会
- (3) からかって。冗談を言って。 / 中納言はわざと意地悪に声をかけている
- (4) 待ち遠しく。じれったく。気がかりで。 / ×「頼りない」ではない
- (5) 引きとめて。つかんで止めて。 / 袖をつかんで行かせないようにした
- (6) 意外で驚きあきれて。 / ★×「あさはかだ」「みすぼらしい」

B 文法

- (7) 「とる」(ラ行四段動詞)の未然形「とら」＋受身の助動詞「る」の連用形「れ」＋接続助詞「て」 / 「歌人として(歌合に)選ばれて」の意
- (8) 係助詞／疑問(～か) / 「参る」は「来」の謙譲語
- (9) 現在推量(今ごろ～ているだろう) / 「おぼす」は「思ふ」の尊敬語
- (10) 尊敬 / ★受身ではない。どちらも定頼中納言の動作に対する敬意
- (11) 已然形(「遠けれ」)に接続し、順接の確定条件(～の

で)を表す。 / 未然形＋ば＝仮定「～なら」との区別

- (12) 反語(こんなことがあってよいものか、いや、ない) / 結び＝「ある」(ラ変動詞「あり」の連体形) / 係助詞「やは」→連体形で結ぶ

C 主語と指す内容

- (13) 小式部内侍が、丹後にいる母・和泉式部のもとへ、歌合に出す歌を作ってもらうために。
- (14) 小式部内侍
- (15) 定頼中納言
- (16) 小式部内侍が、母の助けを借りずにその場で即座にみごとな歌を詠みかけたこと。

D 口語訳

- (17) 丹後へおつかわしになった使いの者は帰って参りましたか。(お母上の歌がまだ届かず)どんなに待ち遠しくお思いでしょう。
- (18) 大江山を越え、生野を通って行く道が遠いので、まだ天の橋立を踏んでみたこともありませんし、母からの手紙も見えておりません。
- (19) これはどうしたことだ、こんなことがあってよいものか、いや、あるはずがない。
- (20) 返歌をすることもできず、袖を引き放して逃げなされた。

E 和歌と内容・記述（解答例）

- (21) 「生野」（丹波の地名）と「行く」／京から丹後へ向かう道すじの地名
- (22) 「踏み」（天の橋立を踏む）と「文」（母からの手紙）／★最頻出
- (23) 丹後への道のりを自分の言葉で詠み、母に歌を作ってもらってなどいないと示した。（三十七字）
- (24) 見くびっていた相手にその場でみごとな歌を返され、驚きあきれて言葉が出なかったから。（四十字）

F 文学史

- (25) 『十訓抄』／説話集／鎌倉時代
- (26) 年少者に教訓を与えるために、十の教訓の項目に分けて説話を集めた説話集。
- (27) 母＝和泉式部／『小倉百人一首』（もとは『金葉和歌集』）

【現代語訳（全文）】

和泉式部が、保昌の妻として（夫の任国である）丹後に下っていたころ、京で歌合があり、小式部内侍が歌人として選ばれて歌を詠むことになったが、定頼中納言がふざけて、小式部内侍が局にいたときに、「丹後へおつかわしになった使いの者は帰って参りましたか。（お母上の歌がまだ届かず）どんなに待ち遠しくお思いでしょう。」と言って、局の前を通り過ぎなされたのを、（小式部内侍は）御簾から半分ほど身を乗り出して、わずかに（中納言の）直衣の袖を引きとめて、

大江山を越え、生野を通って行く道が遠いので、まだ天の橋立を踏んでみたこともありませんし、母からの手紙も見えておりません。

と詠みかけた。（中納言は）思いがけないことで、驚きあきれて、「これはどうしたことだ、こんなことがあってよいものか。」とだけ言って、返歌をすることもできず、袖を引き放して逃げなされた。小式部内侍は、これ以後、歌人としての評判が世に高まったのだった。